

瀬戸内海の環境の保全に関する
愛媛県計画

平成28年11月

愛媛県

目 次

まえがき	1
第1 序説	1
1 計画策定の趣旨	1
2 計画の範囲	1
3 計画の期間	1
第2 計画の目標	1
1 沿岸域環境の保全・再生・創出に関する目標	2
2 水質の保全及び管理に関する目標	2
3 自然景観及び文化的景観に関する目標	3
4 水産資源の持続的な利用の確保に関する目標	3
第3 目的達成のため講ずる施策	3
1 沿岸域環境の保全、再生及び創出	4
(1) 藻場・干潟・砂浜等の保全等	4
(2) 自然海浜の保全等	5
ア 規制の徹底と指導、取締りの強化	5
イ 養浜等による海浜環境の整備	5
(3) 底質改善対策・窪地対策の推進	5
(4) 海砂利の採取の禁止	6
(5) 埋立てに当たっての環境保全に対する配慮	6
(6) 環境配慮型構造物の採用	6
2 水質の保全及び管理	6
(1) 水質総量削減制度等の実施	6
(2) 下水道等の整備の促進	8
① 下水道の整備	8
② その他の生活排水処理施設の整備	9
ア 浄化槽	9
イ 農業集落排水施設等	9
③ し尿処理施設の整備	9
(3) 水質及び底質環境の改善	9
(4) 有害化学物質等の低減のための対策	9
(5) 油等による汚染の防止	10
ア 船舶及び陸上からの油等の排出防止等	10
イ 事故による海洋汚染の未然防止	10

ウ	排出油等防除体制の整備	11
エ	環境保全対策の充実	11
(6)	海水浴場の保全その他の措置	11
3	自然景観及び文化的景観の保全	12
(1)	自然公園等の保全	12
(2)	緑地等の保全	12
ア	良好な自然景観を有する沿岸地域及び島しょ部における る林地の保全	12
イ	沿岸都市地域における緑地の確保	13
ウ	健全な森林の保護育成のための事業等の実施	13
エ	緑地修景措置	13
(3)	史跡・名勝・天然記念物等の保全	13
(4)	漂流・漂着・海底ごみ対策の推進	14
(5)	エコツーリズムの推進	14
(6)	その他の措置	14
4	水産資源の持続的な利用の確保	15
5	廃棄物の処理施設の整備及び処分地の確保	15
(1)	廃棄物の発生抑制、再使用及び再生利用の促進	15
(2)	処理施設等の整備	16
(3)	処分地の確保	16
6	健全な水循環・物質循環機能の維持・回復	16
(1)	海域	16
(2)	陸域	16
7	島しょ部の環境の保全	17
8	基盤的な施策	17
(1)	水質等の監視測定	17
(2)	環境保全に関するモニタリング、調査研究及び技術の 開発等	17
(3)	広域的な連携の強化等	18
(4)	情報提供、広報の充実	18
(5)	環境保全思想の普及及び住民参加の推進	18
(6)	環境教育・環境学習の推進	19
(7)	国内外の閉鎖性海域との連携	19
第4	計画の点検	19

瀬戸内海の環境の保全に関する愛媛県計画

まえがき

この計画は、瀬戸内海環境保全特別措置法（昭和48年法律第110号）第4条第1項の規定に基づき、愛媛県の区域（同法第2条第1項に規定する瀬戸内海及び同法第5条第1項に規定する関係府県の区域のうち愛媛県の区域をいう。）において、瀬戸内海の環境保全に関し実施すべき施策について定めたものである。

第1 序説

1 計画策定の趣旨

この計画は、瀬戸内海の環境の保全に関する基本理念である、「瀬戸内海が、我が国のみならず世界においても比類のない美しさを誇り、かつ、自然景観と文化的景観を併せ有する景勝の地として、また、国民にとって貴重な漁業資源の宝庫として、その恵沢を国民がひとしく享受し、後代の国民に継承すべきものであることに鑑み、瀬戸内海を、人の活動が自然に対し適切に作用することを通じて、美しい景観が形成されていること、生物の多様性及び生産性が確保されていること等その有する多面的価値及び機能が最大限に発揮された豊かな海とする」旨にのっとり、かつ政府が策定した瀬戸内海環境保全基本計画（昭和53年5月総理府告示第11号）に基づき、本県の区域において、瀬戸内海の環境の保全に関し実施すべき施策を明確にし、また、実施する施策をより効果的なものとするため、瀬戸内海の環境の保全に関する中長期にわたる総合的な計画として策定するものである。

また、この計画を策定し、公表することにより、県内の瀬戸内海関係者、さらには広く県民に対し、瀬戸内海の環境保全の推進に対するなお一層の理解と協力を求めるとともに、意識の高揚を図るものである。

2 計画の範囲

この計画は、沿岸域の環境の保全、再生及び創出、水質の保全及び管理、自然景観及び文化的景観の保全、水産資源の持続的な利用の確保等について定める。

3 計画の期間

この計画の期間は概ね10年とする。また、策定時から概ね5年ごとに、本計画に基づく施策の進捗状況について点検を行うものとし、必要に応じて見直しを行うものとする。

第2 計画の目標

瀬戸内海環境保全の推進のためには、関係府県等が相互に協力しながら同一の目標に向かって各々の施策を遂行することが肝要であることにかんがみ、瀬戸内海環境保全基本計画において定められた目標をこの計画の目標とする。

なお、この計画の目標については、豊かな生態系サービス（海の恵み）を、国民全体が将来にわたって継続して享受し、かつ、生物が健全に生息・生育している状態に保っていくため、美しい景観・憩い・多様な生物の生息・生育の場としての「庭」、漁業生産の場としての「畑」、物流や人流・物質の供給路としての「道」に例えられる多面的価値・機能が最大限に発揮された「豊かな瀬戸内海」を目指すものとする。このため、沿岸域の環境、水質等が互いに強く関連し合うことを考慮しつつ、個別目標を次のとおり定める。

1 沿岸域環境の保全・再生・創出に関する目標

- (1) 水質浄化及び物質循環の機能を有し、魚介類も含め多様な生物が生息・生育する場となっている沿岸域における藻場・干潟・砂浜等が適正に保全され、また、必要に応じて再生・創出のための措置が講ぜられていること。
- (2) 海水浴場、潮干狩場等の自然とのふれあいの場等として多くの人々に親しまれている自然海浜等が、できるだけその利用に好適な状態で保全されていること。
- (3) 生活環境及び生物の生息・生育環境に影響を及ぼす底質及び窪地については、必要に応じ、その悪影響を防止・改善するための措置が講ぜられていること。
- (4) 海砂利の採取が行われていないこと。
- (5) 海面の埋立ては、極力その抑制に努めること。やむを得ず埋立てを行う場合には、環境保全に十分配慮することとし、環境影響を回避・低減するための措置が講ぜられていること。
- (6) 海岸保全施設等の整備・更新など、防災・減災対策の推進に当たっては、自然との共生及び環境との調和に配慮すること。

2 水質の保全及び管理に関する目標

- (1) 水質汚濁、赤潮、富栄養化の防止のための対策が計画的かつ総合的に講ぜられていること。水質環境基準（今後設定等されるものも含む。）について、未達成の海域においては可及的速やかに達成に努めるとともに、達成された海域においてはこれが維持されていること。また、湾・灘ごと、季節ごとの地域の実情に応じたきめ細やかな水質管理に関する検討や順応的な取組が進められていること。

赤潮についてはその発生機構の解明に努めるとともに、その発生の人為的要因となるものを極力少なくすることを目途とすること。

- (2) 下水道等の整備により生活排水対策が進められていること。

- (3) 水質及び底質は互いに影響を及ぼす関係であることから、水質の保全とともに底質環境の改善の措置が講ぜられていること。
- (4) 有害化学物質等の低減のための対策が進められていること。
- (5) 油流出事故に係る未然防止措置及び事故発生時における防除体制整備が図られていること。
- (6) 海水浴場、潮干狩場等の自然とのふれあいの場等の水質が良好な状態で保全されていること。
- (7) 健全な水循環機能を維持し、及び増進するとともに、自然浄化能力の向上を図るため、上下流域の連携により森林を整備し、森林の水源かん養機能を確保すること。

3 自然景観及び文化的景観の保全に関する目標

- (1) 瀬戸内海の自然景観の核心的な地域は、その態様に応じて国立公園、国定公園、県立自然公園又は自然環境保全地域等として指定され、瀬戸内海特有の優れた自然景観が失われないようにすることを主眼として、適正に保全されていること。
また、自然海岸については、それが現状よりもできるだけ減少することのないよう、適正に保全されていること。さらに、これまでに失われた自然海岸については、必要に応じ、その回復のための措置が講ぜられていること。
- (2) 瀬戸内海の島しょ部及び海岸部における草木の緑は、瀬戸内海の景観を構成する重要な要素であることにかんがみ、保安林、特別緑地保全地区等の制度の活用等により現状の緑を極力維持するのみならず、積極的にこれを育てる方向で適正に保護管理されていること。
- (3) 瀬戸内海の自然景観と一体をなしている史跡、名勝、天然記念物等の文化財が適正に保全されていること。
- (4) 海面及び海岸が清浄に保持され、景観を損なうようなごみ、汚物、油等が海面に浮遊し、あるいは海岸に漂着し、又は投棄されていないこと。
- (5) 地域の自然や文化等を活かしたエコツーリズムが推進されていること。

4 水産資源の持続的な利用の確保に関する目標

水産資源が、生態系の構成要素であり、限りあるものであることにかんがみ、その持続的な利用を確保するため、生物多様性・生物生産性の観点から環境との調和に配慮しつつ、水産動植物の増殖の推進を図り、科学的知見に基づく水産資源の適切な保存及び管理が実施されるよう一層の推進に努めること。

第3 目標達成のため講ずる施策

これらの計画の目標を実現するため、既に得られた知見と技術を最大限に活用し、現在残されている自然環境の保全や発生負荷の規制等のこれまで実施してきた保

全型施策に加え、沿岸域における良好な環境の再生・創出、生物多様性・生物生産性の確保の観点からの水質の管理、底質環境の改善、美しい自然と人の生活・生業や賑わいが調和した景観の保全等を合わせて基本的な考え方として、各種施策の積極的な実施に努めるものとする。

その施策の検討・実施に当たっては、湾・灘ごとなどの地域の実情や季節性に応じて行うものとし、地域における合意及び隣接地域との調整に十分配慮するものとする。

その際、必要に応じ、森・里・川・海につながりに配慮しつつ地域における里海づくりの手法を導入し、幅広い主体が、地域の状況に応じたあるべき姿を共有し、適切な管理に努めるものとする。

また、対策の効果について科学的な知見が十分に得られていない場合には、科学的に裏付けられたデータの蓄積及び分析を行いつつ、順応的管理の考え方に基づく取組を推進するものとする。

本県における基本的な施策は、次のとおりとする。

1 沿岸域環境の保全、再生及び創出

(1) 藻場・干潟・砂浜等の保全等

第4回自然環境保全基礎調査における海域生物環境調査報告書（平成6年3月環境庁調査）によると、本県の平成5年度調査において、本県の沿岸海域には、約6,208haの藻場があり、ガラモ場が1,431ha、アマモ場が1,778ha、その他の藻場が2,999haとなっている。また、藻場現存量調査結果（平成16年11月愛媛県調査）によると、本県の燧灘及び伊予灘の沿岸海域には、ガラモ場が247ha、アマモ場が1,187ha、大型褐藻類藻場が313haある。

平成18年度瀬戸内海干潟実態調査報告書（平成19年3月環境省調査）によると、本県には加茂川河口等37箇所、約781haの干潟が存在している。

魚介類の産卵成育の場となっている藻場及び魚介類・鳥類等の生態系を維持する上で重要な役割を果たすとされている干潟は、各種開発の進展に伴い、減少する傾向にある。

さらに、藻場については、近年、環境変化等による新たな減少問題も発生している。

このため、水産資源保護法（昭和26年法律第313号）に基づき保護水面に指定されている松山市二神島地先水域、瀬戸内海漁業取締規則（昭和26年農林省令第62号）により藻場等ひき網漁業禁止区域に指定されている西宇和郡伊方町地先水域等22箇所の水域、及び鳥獣の保護及び管理並びに狩猟の適正化に関する法律（大正7年法律第32号）に基づき特別保護地区に指定されている南宇和郡愛南町鹿島の干潟においては、法令に基づく規制措置の適切な運用により、

藻場及び干潟の保全を図るとともに、適宜これら地域指定の見直しを行い、必要に応じ新たな指定又は指定区域の変更を行うものとする。

また、その他の藻場・干潟等についても、水質浄化や生物多様性の確保、環境教育・環境学習の場等として重要な役割を果たしていることから、保全するよう努めるものとする。

開発等に伴い失われた藻場・干潟・自然海浜等については、良好な環境を回復させる観点から、再生・創出するよう努めるものとする。

(2) 自然海浜の保全等

第5回自然環境保全基礎調査における海辺調査報告書（平成10年3月環境庁調査）によると、平成9年度調査において、本県の瀬戸内海の海岸線のうち、自然海岸は約45%、半自然海岸は約22%、人工海岸は約32%、河口部は約1%である。

これらの自然海岸及び半自然海岸のうち、海水浴場として、堀江（松山市）、唐子浜（今治市）等で年間推定約60万人の利用者があるほか、潮干狩場として、高須海岸（西条市）、岩松川河口（宇和島市）等があり、魚釣り場として県下の沿岸一帯で多くの場所が利用されている。

このように自然海浜は、海水浴場、潮干狩場、海辺の自然観察の場等の自然とのふれあいの場や地域住民の憩いの場として、年間を通じ多くの人々に利用され、県民の健康で文化的な生活の確保に大きく寄与しているところであるが、近年これらの自然海浜が減少する傾向にあることから、できるだけその利用に好適な状態で保全されるよう、次の施策を講ずるものとする。

ア 規制の徹底と指導、取締りの強化

自然海浜の保全のため、愛媛県自然海浜保全条例（昭和55年愛媛県条例第3号）に基づき、自然海浜保全地区（23地区）を指定しており、その監視及び指導に努めるものとする。

また、その他県下の貴重な自然海浜が、自然公園法、都市計画法、都市公園法（昭和31年法律第79号）、鳥獣の保護及び管理並びに狩猟の適正化に関する法律及び森林法に基づく各種指定地区に指定されているので、これらの指定地域においては、それぞれ、当該法律に基づく適切な運用を図ることにより、自然海浜がその利用に好適な状態で保全されるよう努めるものとする。

イ 養浜等による海浜環境の整備

自然海浜の保全にとどまらず、自然とのふれあいの場等として、自然環境に配慮した海浜の整備に努めるものとする。

(3) 底質改善対策・窪地対策の推進

底質の悪化により生物の生息・生育の場が大きく失われるなど、底質改善対

策や窪地対策の必要が生じた場合は、浚渫や覆砂、敷砂、海底耕耘、深掘り跡の埋め戻し等の対策に努めるものとする。

なお、深掘り跡の埋め戻しを行う場合においては、周辺海域への影響や改善効果を検討するよう努めるものとする。

(4) 海砂利の採取の禁止

海砂利採取については、自然環境への影響が懸念されており、環境問題発生
の恐れがあること等から、平成 14 年度に県骨材対策委員会から出された検討結
果を踏まえ、3 年間の猶予期間において、平成 18 年 4 月から採取禁止としてお
り、今後も採取禁止を堅持するものとする。

(5) 埋立てに当たっての環境保全に対する配慮

本県の瀬戸内海区域における埋立てについては、未利用地や既存施設の有効
利用のほか、残土等の搬出抑制及び有効利用、廃棄物の発生抑制及び再利用等
を通じた循環型社会の形成を推進することによって、極力その抑制に努めるも
のとする。

なお、やむを得ず公有水面埋立法（大正 10 年法律第 57 号）第 2 条第 1 項の免
許又は同法第 42 条第 1 項の承認を行う場合にあっても、瀬戸内海環境保全特別措
置法第 13 条第 1 項の埋立てについての規定の運用に関する同条第 2 項の基本方
針に沿って、環境保全に十分配慮するものとする。

また、環境影響評価法（平成 9 年法律第 81 号）及び愛媛県環境影響評価条例
（平成 11 年愛媛県条例第 1 号）に基づく環境影響評価に当たっては、環境への
影響の回避・低減を検討するとともに、必要に応じ適切な代償措置を検討する
ものとする。その際、地域住民の意見が適切に反映されるよう努めるものとし
る。

これらの検討に際しては特に藻場・干潟等は、一般に生物多様性・生物生産
性が高く、底生生物や魚介類の生息・生育、海水浄化等において重要な場であ
ることを考慮するものとする。

(6) 環境配慮型構造物の採用

生物の生息・生育空間の再生・創出のため、新たな護岸等の整備や既存の護
岸等の補修・更新時には、環境への配慮についても検討するよう努めるものと
する。

また、海岸保全施設の整備・更新など、防災・減災対策の推進に当たっては、
自然との共生及び環境との調和に配慮するよう努めるものとする。

2 水質の保全及び管理

(1) 水質総量削減制度等の実施

本県の瀬戸内海区域は、燧灘、伊予灘（安芸灘含む。）及び宇和海（豊後水道）

からなっている。これらの海域に流入等する排水の主な発生源は、燧灘は紙・パルプ製造業、化学工業、化学繊維工業、染色工業等の工場排水、伊予灘は石油化学、化学繊維等の工場排水と生活排水、宇和海は生活排水、小規模事業場排水及び水産養殖場等である。

本県海域では、水質環境基準の類型指定が現在化学的酸素要求量等については8水域、全窒素・全りんについては5水域で行われている。これら海域の環境基準点の平成26年度における水質は、健康項目については100%環境基準を達成している。一方、生活環境項目については、その代表的指標である化学的酸素要求量でみると、環境基準達成率はA類型94%、B類型100%、C類型100%である。また、富栄養化の主要な原因物質である窒素及びりんについてみると、本県では5海域全てⅡ類型に指定しており、環境基準達成率は100%である。これら海域の水質について、環境基準が未達成なものについては、これを達成させるためには計画的に汚濁負荷量の削減を図り、またこれが達成されているものについてはその状態を維持することが必要である。

特に、広域的閉鎖性水域である瀬戸内海については、関係区域内で発生する汚濁負荷量の総量を計画的に削減することが肝要であることから、水質汚濁防止法（昭和45年法律第138号）及び瀬戸内海環境保全特別措置法の規定に基づき、水質総量削減制度が実施されている。

本県においては、化学的酸素要求量、窒素含有量及びりん含有量に係る総量削減基本方針（瀬戸内海）に定められた削減目標量を達成するため、発生源別の削減目標量を定めた化学的酸素要求量、窒素含有量及びりん含有量に係る総量削減計画（愛媛県）を策定しており、この計画を積極的に実施していくとともに、計画されている各種施策の進捗状況及び瀬戸内海に流入する汚濁負荷量の実態等の把握に努めるものとする。

また、生物多様性・生物生産性の確保の重要性にかんがみ、地域における海域利用の実情を踏まえ、湾・灘ごと、季節ごとの状況に応じたきめ細やかな水質管理について、その影響や実行可能性を十分検討しつつ、順応的な取組を推進するものとする。

これらの対策を推進するに当たっては、(2)に掲げる下水道等の整備のほか、次の施策を総合的に講ずるものとする。

- ア 産業排水については、総量規制基準の遵守等の観点から、処理施設等の改善整備及び維持管理の適正化に努める。また、環境保全施設の整備促進を図るため、愛媛県環境保全資金融資制度等の積極的な活用を促進を図るものとする。
- イ 漁業に由来する汚濁負荷量を削減するため、持続的養殖生産確保法（平成11年法律第51号）、愛媛県魚類養殖管理要領（昭和53年2月4日制定）等

に基づき、魚介類の養殖漁場の底質の悪化による富栄養化が生じないよう、放養尾数を養殖生簀面積1㎡あたり、ハマチでは35kg以下、その他の魚類では40kg以下に抑えるなど、適切な漁場管理に努める。

また、持続性の高い農業生産方式の導入の促進に関する法律（平成11年法律第110号）、愛媛県環境保全型農業推進基本方針（平成6年3月28日制定）等に基づき、肥料の施用量の低減を図ること等により、環境保全型農業を推進する。

さらに、家畜排せつ物の管理の適正化及び利用の促進に関する法律（平成11年法律第112号）、家畜排せつ物の利用の促進を図るための愛媛県計画（平成20年5月30日制定）等に基づき、畜産農家と耕種農家との連携による家畜排せつ物の農地還元を行うとともに、巡回指導等により適正な家畜排せつ物の処理施設の設置及び管理技術の指導に努める。

ウ 河川等の直接浄化等を推進するとともに、微生物を用いた水質浄化システムの開発等自然環境が有する水質浄化機能の積極的な活用を図るものとする。また、底質の改善を推進する。

エ 富栄養化防止に係る普及啓発を推進するとともに、総合的な栄養塩管理対策の推進を図るため、窒素及びりん海域における収支挙動及び流入実態の調査を行うとともに、汚水処理技術の開発に関する調査研究を推進し、その結果に基づき必要な措置を検討するものとする。

なお、本県の瀬戸内海の区域における赤潮は、平成26年度に10件発生しており、依然として漁業被害が生じているので、被害を軽減・未然防止するため、漁場環境モニタリング調査指導事業により、国、県、市町及び漁協等の情報交換・監視通報体制を強化するとともに、赤潮対策に関する調査研究を大学も交え引き続き推進する。

(2) 下水道等の整備の促進

生活排水については、瀬戸内海の実情等にかんがみ、水質総量削減制度の実施、富栄養化対策の推進等の観点から、第三次愛媛県全県域下水道化基本構想（平成25年3月策定）に基づき、市町と協力して、地域の実情等に応じ、下水道や農業・漁業集落排水施設、浄化槽等の生活排水処理施設及びし尿処理施設の整備を促進する。また、必要に応じ高度処理の導入やきめ細かな水質管理を図る。

① 下水道の整備

瀬戸内海の水質保全を図るうえで、生活排水に係る汚濁負荷量及び栄養塩類の削減対策としての下水道の整備は、極めて重要な施策である。

本県の関係区域における下水道は、平成26年度末において、11市5町で終末処理場が稼働しているが、処理人口は727千人と依然低水準の状況にある。

下水道は、瀬戸内海の水質保全を図る上で重要な汚水処理施設であるため、16

市町で取り組んでいる下水道施設の整備促進に努めるものとする。

下水道終末処理場については、維持管理の徹底等により排水水質の安定及び向上に努める。また、流域等が一体となった流域別下水道整備総合計画を策定し、水質保全に努めるものとする。

② その他の生活排水処理施設の整備

下水道整備が当分の間見込めない地域や下水道整備予定区域外においては、生活排水対策として、浄化槽、農業集落排水施設等の整備が重要な施策である。

ア 浄化槽

関係区域における浄化槽については、浄化槽設置整備事業及び浄化槽市町村整備推進事業により、平成 26 年度末までに、11 市 6 町で 49,955 基が整備されており、今後も地域の特性を考慮し、事業を推進するものとする。

また、浄化槽法（昭和 58 年法律第 43 号）、建築基準法（昭和 25 年法律第 201 号）及び愛媛県浄化槽取扱指導要綱（昭和 60 年 9 月 28 日制定）に基づき、設置及び維持管理の指導を徹底するとともに、法定検査制度の適正運用に努めることとし、規模の大きな浄化槽については、必要に応じ、窒素及びりんの除去等高度処理浄化槽の設置を指導するものとする。

イ 農業集落排水施設等

農業集落排水施設、コミュニティプラント及び漁業集落排水施設については、平成 26 年度末までに 77 施設が整備されている。

今後も、地域の特性を考慮し、農業集落排水施設、コミュニティプラント、漁業集落排水施設等の整備を促進するとともに、必要に応じ、窒素及びりんの除去等高度処理施設の設置を指導するものとする。

③ し尿処理施設の整備

し尿処理施設については、平成 26 年度末において、13 施設が整備されており、その処理能力は、1,278kℓ/日である。

下水道整備との関連を配慮して必要なし尿処理施設の整備を進めるとともに、施設の新設及び増改築に併せて、窒素及びりんの除去性能の向上を含めた高度処理の積極的な導入を図るものとする。

(3) 水質及び底質環境の改善

底質環境に悪影響を及ぼす水質の悪化、水質に悪影響を及ぼす堆積した有機物の分解等への対策については、海域利用の実情に応じて、浚渫や覆砂、敷砂、海底耕耘等の底質環境の改善対策を水質保全対策等と組み合わせるなど、環境との調和に十分配慮しつつ適切な措置を講ずるよう努めるものとする。

(4) 有害化学物質等の低減のための対策

本県においては、水質環境基準の健康項目については、全測定地点で環境基準を達成しており、今後も特定施設の設置等の許可制の適切な運用等により、

水質環境基準の達成推進を図るものとする。

特に、ダイオキシン類についてはダイオキシン類対策特別措置法（平成 11 年法律第 105 号）に基づく排出規制の推進、常時監視の実施による状況の把握により、水質環境基準の達成推進に努めるものとする。また、ダイオキシン類の分解技術研究についても積極的に推進するものとする。

また、有害性のある化学物質については、特定化学物質の環境への排出量の把握等及び管理の改善の促進に関する法律（平成 11 年法律第 86 号）に基づき排出量の把握及び管理を促進するものとする。

さらに、水銀又はPCB 等人の健康に有害な物質を含む汚泥の堆積による底質の悪化を防止するとともに、これらの物質につき国が定めた除去基準を上回る底質の除去等の促進を図るものとする。

(5) 油等による汚染の防止

本県の瀬戸内海の区域には、重要港湾の三島川之江港、新居浜港、東予港、今治港、松山港及び宇和島港のほか、44 の地方港湾がある。

石油コンビナート等特別防災区域には、松山地区、新居浜地区、菊間地区及び波方地区の 4 地区が指定されている。

また、来島海峡を始め本県の海域は、船舶の往来が多く、地形が複雑である。

このような状況を踏まえ、次の施策を講ずることにより、船舶廃油及び船舶の事故等に起因する流出油等による海域の汚染の防止を図るものとする。

特に、油等による汚染については、1990 年の油による汚染に係る準備、対応及び協力に関する国際条約（平成 7 年条約第 20 号）及び 2000 年の危険物質及び有害物質による汚染事件に係る準備、対応及び協力に関する議定書の規定に基づき策定された油等汚染事件への準備及び対応のための国家的な緊急時計画（平成 18 年 12 月 8 日閣議決定）に基づき、油等汚染事件に伴う海域環境被害の防止又は回復のための措置が適切に実施できるよう地域の実情に応じた準備及び対応の施策を積極的に推進する。

ア 船舶及び陸上からの油等の排出防止等

船舶及び陸上からの油等の排出防止のため、海洋汚染等及び海上災害の防止に関する法律（昭和 45 年法律第 136 号）、港則法（昭和 23 年法律第 174 号）、廃棄物の処理及び清掃に関する法律（昭和 45 年法律第 137 号）、水質汚濁防止法等の規定に基づく規制の徹底と監視取締りの強化を図る。

また、現在松山港、菊間港等に設置されている廃油処理施設の活用により、船舶廃油等の適正な処理を図る。

イ 事故による海洋汚染の未然防止

事故による海洋汚染を未然に防止するため、消防法（昭和 23 年法律第 186 号）及び石油コンビナート等災害防止法（昭和 50 年法律第 84 号）に基づく

規制の徹底と指導監視の強化を図るとともに、本県及び関係市町の地域防災計画並びに愛媛県石油コンビナート等防災計画（昭和 52 年 3 月 29 日制定）による防災活動等の適切な運営を推進する。

また、船舶衝突事故等による油等流出を防止するため、海上交通安全法（昭和 47 年法律第 115 号）、港則法等に基づく規制の徹底と指導取締りの強化を図るとともに、海上交通の安全のための施設の整備を促進する。

ウ 排出油等防除体制の整備

排出油等の流出拡大を防ぐため、海洋汚染等及び海上災害の防止に関する法律及び石油コンビナート等災害防止法に基づくオイルフェンス、薬剤等の備付義務の徹底を図るとともに、これら排出油等防除資機材等の整備に努める。

また、排出油等を速やかに回収するため、現在、松山港及び菊間港に整備されている油回収船の積極的な活用を図るものとする。

さらに、大量の流出油等に対しては、海上災害防止センターの活用を図るほか、瀬戸内海中部海域排出油等防除計画（昭和 53 年 3 月 30 日付け海上保安庁長官通知）及び瀬戸内海東部海域排出油等防除計画（昭和 53 年 3 月 30 日付け海上保安庁長官通知）に基づき、迅速かつ的確な排出油等の防除のための措置の実施を図るとともに、各地区の排出油等防除協議会等を利用して関係相互の協力体制を整備し、防除活動等の適切な運営を促進する。

エ 環境保全対策の充実

事故発生時における自然環境等の保全対象、保全方策等についての検討並びに環境への影響の少ない新たな油防除技術及び微生物を利用した環境修復技術の調査研究を推進するとともに、油等流出事故による自然環境等に及ぼす影響調査を実施し、事故後の回復状況を評価するため、平常時の自然環境等の観測データの蓄積に努めるものとする。

(6) 海水浴場の保全その他の措置

上記のほか、海水浴場、潮干狩場、海辺の自然観察の場等の自然とのふれあいの場や地域住民のいこいの場の水質について、良好な状態で保全するように努めるものとする。

また、水質汚濁の防止のため、瀬戸内海環境保全特別措置法に基づく特定施設の設置等の許可及び水質汚濁防止法の規定に基づく排水規制の適切な運用並びに生活排水対策の計画的推進により水質環境基準の達成維持を図るものとする。

さらに、他の海域から入り込む魚介類や微生物等が、瀬戸内海の特性によりその水質、生態系、水産資源等に大きな影響を及ぼすおそれがあることから、これらに対して十分留意するよう努めるものとする。

3 自然景観及び文化的景観の保全

(1) 自然公園等の保全

本県の瀬戸内海の区域における自然景観の核心的地域としては、来島海峡を主要景観とする芸予諸島と忽那七島等が瀬戸内海国立公園に、宇和海南部のリアス海岸及び日振島、御五神島等が足摺宇和海国立公園に、それぞれ自然公園法（昭和 32 年法律第 161 号）に基づき指定されている。

また、佐田岬半島、宇和海北部のリアス海岸、大島、黒島、佐島、高島等が、愛媛県県立自然公園条例（昭和 33 年愛媛県条例第 50 号）に基づく佐田岬半島宇和海県立自然公園に指定されている。

これらの自然公園については、瀬戸内海特有の優れた自然景観が失われないようにすることを主眼として、適正に保全されるよう関係法令に基づく規制の徹底と監視及び指導の強化を図るとともに、国立公園清掃活動事業等による清掃美化及び自然保護思想の普及啓発に努めるものとする。

また、公園事業の適切な執行により、憩いの場として、利用の促進を図るとともに、必要に応じて国立公園及び県立自然公園の区域等の見直しを進めるものとする。

さらに、国立公園等と密接な関連を有する地域についても、自然景観の保全に努めるものとする。

(2) 緑地等の保全

瀬戸内海の島しょ部及び海岸部における草木の緑は、瀬戸内海の景観を構成する重要な要素である。

本県の島しょ部及び海岸部の植生は、あかまつ、くろまつ等の針葉樹、しい、かし等の照葉樹である。

特に、くろまつは白砂青松の景観を呈し、瀬戸内海のシンボリックな存在であるが、松林は松くい虫による被害や里山の利用形態の変化により、減少している。

また、各種開発により自然緑地も減少してきている。

このため、新しい「えひめ森林・林業振興プラン」第 5 次愛媛県総合林政計画（平成 28 年 3 月策定）に基づき、森林（もり）づくりを推進するとともに、現状の緑を極力維持し、かつ積極的にこれを育てるため、次のような施策を推進するものとする。

ア 良好な自然景観を有する沿岸地域及び島しょ部における林地の保全

良好な自然景観を有する沿岸地域及び島しょ部における林地を保全するため、森林法（昭和 26 年法律第 249 号）に基づく保安林制度により、森林の機能を維持増進するとともに、林地開発許可制度により、林地の無秩序な

開発の防止を図る。

また、採石法（昭和 25 年法律第 291 号）及び砂利採取法（昭和 43 年法律第 74 号）に基づく採取計画の認可並びに海岸法（昭和 31 年法律第 101 号）に基づく海岸保全区域における行為の許可に際しては、緑地等の保全につき十分配慮し、採取跡地における緑化の確実な履行の確保に努めるものとする。

イ 沿岸都市地域における緑地の確保

松山市等における都市公園整備事業及び継続工事実施中の三島川之江港、宇和島港等における港湾環境整備事業（緑地等施設）を積極的に促進するとともに、都市計画法（昭和 43 年法律第 100 号）に基づく風致地区（現在 15 箇所、696ha 指定済）等の指定を進め、その保全に努める。

なお、都市の緑地の適正な保全及び緑化の一層の推進を総合的かつ計画的に行うための方針である緑の基本計画の策定を推進するものとする。

ウ 健全な森林の保護育成のための事業等の実施

森林環境保全整備事業を積極的に推進するとともに、森林病虫害の防除対策を進め、さらには治山事業等を促進することにより、健全で快適な森林の保護育成に努め、森林構成の多様化を推進するものとする。

エ 緑地修景措置

開発等により、やむを得ず緑が損なわれる場合においては、本県の開発許可制度の技術基準（昭和 46 年制定）、大規模開発行為に関する指導要綱（平成 13 年 5 月 18 日制定）又は開発行為の許可基準の運用細則について（平成 14 年 5 月 8 日付け林野庁長官通知）等に基づいて公園、緑地等を確保させ、併せて植栽等を指導するなどして緑の修復に努めるものとする。

(3) 史跡・名勝・天然記念物等の保全

瀬戸内海には、自然景観と一体をなしている史跡、名勝、天然記念物等が数多い。本県の区域で文化財保護法（昭和 25 年法律第 214 号）に基づき指定されている史跡として能島城跡が、名勝として波止浜、志島ヶ原等が、天然記念物として三崎のアコウがあり、重要文化的景観として遊子水荷浦の段畑が選定されている。また、愛媛県文化財保護条例（昭和 32 年愛媛県条例第 11 号）に基づいて指定されている史跡として甘崎城跡が、名勝として法王ヶ原、鹿島等が、天然記念物としてカブトガニ繁殖地、宇和海特殊海中資源群等がある。

これら文化財は、できるだけ良好な状態で保存されるよう関係法令に基づく規制を徹底するとともに、保存修理及び環境整備等の対策を積極的に進めるものとする。

また、水軍関連文化財の発掘調査や所在調査等を積極的に行うとともに、水軍の歴史・文化にふさわしい景観の整備に努め、個性豊かな文化財の普及啓発に努めるものとする。

(4) 漂流・漂着・海底ごみ対策の推進

海岸漂着物等については、美しく豊かな自然を保護するための海岸における良好な景観及び環境の保全に係る海岸漂着物等の処理等の推進に関する法律及び同法基本方針に基づき、本県においても愛媛県海岸漂着物対策推進地域計画（平成24年1月）を策定しており、海岸漂着物等の円滑な回収・処理・効果的な発生抑制対策を推進する。漂流・海底ごみについては、同法附帯決議に基づき、実態把握や回収・処理、発生抑制対策等に積極的に取り組むものとする。

このため、陸域を含めたごみ、油等の投棄を防止するため、海洋汚染等及び海上災害の防止に関する法律、港則法、海岸法及び廃棄物の処理及び清掃に関する法律の規定に基づく規制の徹底と監視取締りの強化を図るとともに、クリーン愛媛運動、海浜美化活動、愛リバー・サポーター制度、愛ビーチ・サポーター制度等の広報活動や清掃活動への住民参加及び3Rの推進等を通じて、ごみの発生抑制、海面、海浜及び河川の美化意識の向上や清掃の実施に努めるものとする。

また、海上に浮遊するごみ、油等を回収するため、松山港及び三島川之江港に配備されている清掃船並びに松山港及び菊間港に配備されている油回収船を積極的に活用していくものとする。

(5) エコツーリズムの推進

瀬戸内海に特有な景観を活用して、都市住民を含む市民が海や自然の保護に配慮しつつ自然等とふれあい、これらについての知識や理解が深まるよう、近隣県の関係団体と連携し、エコツーリズム推進法に基づいたエコツーリズム推進に努めるものとする。この際、独自の景観を残している島しょ部をはじめ、しまなみ海道とその周辺など地域が持つ特有の魅力を再評価すると同時に、地域の活性化にもつながるよう努めるものとする。

(6) その他の措置

自然景観の保全のため、以上の施策を推進するほか、開発等により自然海岸が減少し、海岸の景観が損なわれている場合もあることにかんがみ、これらの施策の実施に当たっては、景観の保全について十分配慮し、これまでに失われた自然海岸については、必要に応じ、その回復のための措置を講ずるよう努めるものとする。

また、平成8年12月17日の第26回瀬戸内海環境保全知事・市長会議で採択された「瀬戸内海景観宣言」により、国や関係府県市の相互協力の下、それぞれの地域の特性や個性を考慮しつつ、瀬戸内海のまとまりのある内海景観を保全し、及び創造していくものとする。

さらに、瀬戸内海各地に点在する漁港、段々畑、まち並み等の自然景観と一体となって重層的にそれぞれの地域の個性を反映している文化的景観について

も、適切に保全されるよう配慮するものとする。

4 水産資源の持続的な利用の確保

水産資源が生態系の構成要素であり、限りあるものであることにかんがみ、その持続的な利用を確保するため、生物多様性・生物生産性の観点から環境との調和に配慮しつつ、適切な栄養塩量を維持し、生態系の保全と水産動植物の増殖推進を図り、科学的知見に基づく水産資源の適切な保存及び管理が実施されるよう一層の推進に努めるものとする。

藻場・干潟は重要な漁場であるばかりでなく、水産生物の産卵、幼稚魚の成育等の資源生産の場としての機能や、有機物の分解による水質の浄化等の様々な機能を有していることを踏まえ、その保全・創造に努めるものとする。

水産生物の生活史に対応した良好な生息・生育環境空間を創出するため、より広域的・俯瞰的な視点を持った漁場整備と水域環境保全対策の推進に努めるものとする。

また、愛媛県栽培漁業基本計画に基づき、種苗の生産に取り組むとともに、沿岸漁場整備開発事業で整備した増殖場などの生息適地に放流することにより、効果的な栽培漁業に努めるものとする。

さらに、愛媛県漁業調整規則や海洋生物資源の保存及び管理に関する法律（平成 8 年法律第 77 号）等による法的な資源管理のほか、愛媛県資源管理指針に基づき漁業者自らが資源管理を進め、広く一般の理解を深めるとともに、遊漁者にも資源管理において一定の役割を果たしてもらえよう努めるものとする。

5 廃棄物の処理施設の整備及び処分地の確保

瀬戸内海的环境保全を図るためには、大量生産・大量消費・大量廃棄型の社会からの転換を図り、廃棄物の発生抑制、再使用及び再生利用の促進、処理施設等の整備等の総合的施策を推進することにより、廃棄物としての要最終処分量の減少等を図ることが大切である。このため、次の施策を積極的に実施するものとする。

(1) 廃棄物の発生抑制、再使用及び再生利用の促進

循環型社会形成推進基本法（平成 12 年法律第 110 号）の趣旨を踏まえた、えひめ循環型社会推進計画のほか愛媛県資源循環促進税条例（平成 18 年愛媛県条例第 52 号）等に基づき、廃棄物の発生抑制、再使用及び再生利用の促進、処理施設等の整備等の総合的施策を推進することにより、循環型社会システムの構築に努め、廃棄物の減量及び資源化対策等を推進するものとするとともに、最終処分量の減少等を図るものとする。

なお、併せて資源循環優良モデルの認定等環境ビジネスの育成を図るものとする。

(2) 処理施設等の整備

本県の関係区域の平成 26 年度末における一般廃棄物のごみ処理施設の整備状況は、ごみ焼却施設 17 箇所（処理能力 1,846 トン/日）、再生利用施設（リサイクルプラザ・センター）7 箇所（処理能力 110 トン/日）となっており、現在これらの施設により処理を行う一方、循環型社会形成推進交付金、廃棄物処理施設整備交付金及び二酸化炭素排出抑制対策事業費交付金により施設の整備が進められている。

現在、周辺施設との集約化及び廃焼却炉の早期解体に努めているところであり、今後とも処理施設の整備等の総合的施策を推進するものとする。

また産業廃棄物については、事業所及び処分業者に対する指導及び監視を徹底するとともに、えひめ循環型社会推進計画に基づき、適正な処理体制の整備を図るものとする。

(3) 処分地の確保

本県の関係区域においては、一般廃棄物最終処分場が平成 26 年度末において、19 箇所（残余容量 1,161 千 m^3 ）、産業廃棄物最終処分場が平成 26 年度末において、34 箇所（残余容量 6,549 千 m^3 ）が確保されており、廃棄物の量は減少傾向にあるものの、今後とも安全性の高い最終処分場を確保する必要がある。

このため、地域住民の理解のもと処分場の確保に努めるほか、廃棄物となる以前を含めた循環型社会システムの構築に努め、最終処分量の減量化を促進するものとする。

なお、廃棄物の海面埋立処分に際しては、環境保全と廃棄物の適正な処理の両面に十分配慮するとともに、当該処分地が地域で果たす役割や大規模災害等に備えた災害廃棄物の処分地の確保に対する社会的要請の観点から、整合性を保った廃棄物処理計画及び埋立地の造成計画によって行うものとする。

6 健全な水循環・物質循環機能の維持・回復

健全な水循環・物質循環機能の維持・回復を図るため、流域を単位とした関係者間の連携の強化に努めつつ、各地域で次の施策を実施する。

(1) 海域

海域と陸域との連続性に留意して、藻場、干潟、自然海岸等の沿岸域の環境の保全に努めるものとする。

(2) 陸域

森林や農地の適切な維持管理、河川、湖沼等における自然浄化能力の維持及び回復、地下水の涵養、下水処理水の再利用等に努めるものとする。また、これらの施策の推進に当たっては、流域を単位とした関係者間の連携の強化に努めるものとする。

7 島しょ部の環境の保全

本県には、199の島があり、これら島しょ部では、限られた環境資源を利用した生活が営まれていることから、その環境保全は住民や社会経済のあり方に直結する課題であることにかんがみ、環境容量の小さな島しょ部においては、特に環境保全の取組みが重要であり、全町で生活排水処理施設が整備されている上島町のように、今後とも環境保全施設の整備を促進する。

8 基盤的な施策

(1) 水質等の監視測定

瀬戸内海の水質保全対策の実効を期するには、公共用水域の環境基準の維持達成状況及び水質汚濁の発生源における排水基準の遵守状況を把握するため、水質等の監視測定が必要である。

このため、公共用水域については、平成27年度、水質汚濁に係る環境基準点として、海域129地点、河川42地点、湖沼6地点、合計177地点において水質汚濁防止法による測定計画に基づき、関係機関の相互協力の下に、常時監視に努めているところであるが、今後とも、これら常時監視の拡充強化を図り、監視体制の整備に努めるものとする。

また、水質汚濁の発生源については、水質汚濁防止法及び愛媛県公害防止条例に基づき、工場又は事業場に対する排水基準の遵守、指導の徹底等に努めるとともに、化学的酸素要求量、窒素含有量及びりん含有量に係る総量削減制度の施行に伴い、指定地域内事業場における汚濁負荷量を的確に把握するための測定体制の充実を図るものとする。

さらに、工場・事業場等からの発生負荷量の管理業務や公共用水域の水質監視業務に伴うデータ整理及び解析機能の質的向上を図るものとする。

また、ダイオキシン類については、ダイオキシン類対策特別措置法に基づき、平成27年度は海域4地点、河川10地点、地下水2地点の調査を実施し、県下の環境状況の把握に努めているところであり、今後とも常時監視の継続実施に努めるものとする。

(2) 環境保全に関するモニタリング、調査研究及び技術の開発等

本県においては、愛媛県立衛生環境研究所を中心に、県の試験研究機関や大学等の関係機関の連携の下に、環境保全に関する調査研究や技術開発を進めており、し尿汚泥等の焼却灰からのリン回収技術の開発研究等新しい環境技術の調査研究を、関係機関と連携し、行っているところである。このほか、水産研究センター及び栽培資源研究所が中心となって、赤潮の発生メカニズムの解明並びにそれらの防除技術の開発、環境影響評価手法の向上に関する調査研究、

生物多様性・生物生産性の確保の観点からの水質管理等に関する調査研究を今後とも推進するものとする。

さらに、栄養塩類の適切な管理等に関する順応的管理に向けた実証事業等を行う場合は、その効果及び影響について正確かつ継続的なモニタリングを行うとともに、課題に対する科学的・技術的な解決策のための研究に努めるものとする。

今後とも、関係機関との情報交換や連携を図り、瀬戸内海における良好な環境を保全し、回復させるための調査研究及び技術の開発に努めるものとする。

また、瀬戸内海に関する環境情報、調査研究及び技術開発の成果等のデータベースを整備し、情報の共有化及び情報収集の効率化に努めるものとする。

(3) 広域的な連携の強化等

瀬戸内海は、13府県が関係する広域的な海域であることから、環境保全施策の推進のため、各地域間の広域的な連携の一層の強化を図るものとする。

健全な水循環・物質循環機能の維持及び回復や里海づくりのための取組みの推進、住民参加の推進、環境教育・環境学習の充実を図るため、今後も、流域を単位とした関係者間の連携の強化を図るものとする。

また、現在、瀬戸内海環境保全知事・市長会議等により、地方公共団体の環境保全の取組みに対して相互に意見を述べる機会を設けること等により、一層の連携の強化を図るものとする。

(4) 情報提供、広報の充実

住民参加、環境教育・環境学習、調査研究等を推進するため、食、文化、レクリエーションを通じた普及啓発活動、市民の環境に対する認識の確認、多様な情報に関するデータベースの整備等により広く情報を提供するシステムの構築等を進めるとともに、ホームページ、広報誌等を通じて、瀬戸内海の環境の現状及び汚濁負荷や廃棄物の排出抑制への取組み等の広報に努め、せとうちネットの活用等により情報の共有化を進めることとする。

(5) 環境保全思想の普及及び住民参加の推進

瀬戸内海の環境保全対策を推進するに当たっては、生活排水や廃棄物等も含めた総合的な対策が必要である。

その実効を期するためには、国、地方公共団体、事業者、漁業者、民間団体、市民等がその責務を果たすことはもちろんのこと、瀬戸内海地域の住民や民間団体及び瀬戸内海を利用する人々の正しい理解と協力、地域における目標の共有が不可欠である。

このため、県民に対して、各種の広報活動や県民参加型イベントを通じて、良好な生活環境の保全に関する意識の向上に努めるとともに、河川、海岸等へのごみの不法投棄防止、清掃美化活動等民間のボランティア活動などとの連携

を図り、瀬戸内海の環境保全のための県民運動の推進に努めるものとする。

また、公益社団法人瀬戸内海環境保全協会等の民間団体による環境ボランティアの養成等への取組みの支援に努めるものとする。さらに、環境保全施策の策定に当たっては、パブリックコメントの実施等により、住民意見の反映に努めるものとする。

(6) 環境教育・環境学習の推進

瀬戸内海の環境保全に対する理解や環境保全活動に参加する意識及び自然に対する感性や自然を大切に思う心を育むため、地域の自然及びそれと一体的な歴史的文化的要素を積極的に活用しつつ、国、地方公共団体、事業者及び民間団体の連携の下、環境教育・環境学習を推進するものとする。このため、海とのふれあいを確保し、その健全な利用を促進する施策の整備や理解促進のためのプログラム等の整備等に努めるものとする。

また、国立公園等を活用した自然観察会等地域の特性を生かした体験的学習機会の提供やボランティア等の人材育成及び民間団体の活動に対する支援等に努めるものとする。

(7) 国内外の閉鎖性海域との連携

国内外の閉鎖性海域における環境保全に関する取組みとの連携を強化し、瀬戸内海の環境保全の一層の推進を図るとともに、国内外における取組みに積極的に貢献するため、公益財団法人国際エメックスセンターの活用等により、閉鎖性海域に関する国際会議等の支援、積極的な参加、人的交流、情報の発信及び交換等に努めるものとする。

第4 計画の点検

この計画の点検の際には、水質及び底質の汚染状態を示す項目、水温等のほか、各種指標を用いて取組の状況を把握するものとする。なお、数値化しにくい要素を含む取組に関しては、具体的な施策の実施事例等により取組の状況を把握するものとする。